2017年8月20日

福音書からのメッセージ

イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とお答えになると、女は言った。「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」
（マタイによる福音書15章26～27節）

イエス様の前に、一人の女性があらわれました。彼女は悪霊によって苦しめられている娘をいやして欲しい、その一心でイエス様の元にやってきました。このような人は、きっと大勢いたと思います。でも今までのいやしの物語と決定的に違うところがあります。それは、彼女はユダヤ人ではなかった、つまり異邦人であったということです。

この時代、ユダヤの人々は、イスラエルの民こそが神さまに選ばれた民であり、救いにあずかると思っていました。そして異邦人と呼ばれる人たちは、救われるはずがない、神さまの裁きの前に滅んでしまう者なのだと考えていたのです。

イエス様は彼女の求めに対し、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」と拒絶します。当時ユダヤ人は、動物の死体やゴミをあさる犬を、「汚れた動物」だとみなしていました。今のように、かわいいペットとは考えていませんでした。そしてユダヤ人は異邦人のことを、犬と呼んで差別していたのです。

イエス様はこれらの言葉を、どういう気持ちで発せられていたのでしょうか。イエス様は女性の信仰が本物なのか、何度も試されたのでしょうか。結果的にカナンの女性はイエス様に何度も食い下がって、願いを受け入れられました。

この聖書の箇所から、わたしたちは二つ

のことを学びたいと思います。一つはこの女性の姿勢です。彼女の娘は病気でした。そして彼女には、イエス様に頼るしか道が残されていませんでした。できればいやしてほしいなぁというレベルではないのです。何が何でもいやしてくれ。食卓の下でおこぼれを待つ犬でもいい。それでいいから、恵みをください。この彼女の信仰に学ぶところは、大いにあると思います。

二つ目です。わたしたちはいつの間にか、この物語に出てくる弟子たちのようになってはいないでしょうか。弟子たちは、必死でイエス様にすがるカナンの女性を見て、こう言いました。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」と。何と愛のない言葉でしょうか。しかし当時の多くのユダヤ人は、同じように異邦人は排除されて当然だと考えていたのです。ではわたしたちはどうでしょうか。教会に来て、礼拝を受け、聖餐をいただくときに、それは自分の特権だと思ってはいないでしょうか。知らず知らずのうちに、排他的になってはいないでしょうか。

わたしたちは受けた恵みを、自分だけのものとして握りしめていてはいけないのです。世の中の様々な壁を乗り越えて、外に向かって、イエス様を伝えていく。それがわたしたちに求められている、信仰者としての姿なのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/